

「はじめまして、もの言うオブジェ開高です」

そのひとは例の坎高い声でそう言うと、やわらかで肉厚の手をさしのべてきた。

一九八八年の五月。私はロンドンの中心街にあるホテルの一室で、小説家の開高さんにはじめてお会いした。『開高健のスコットランド釣り紀行』というテレビ番組のロケのためである。私の本業は広告のコピーを書くことであるが、当時この番組のメインスポンサーであるS社の仕事をしていたことから、このドキュメンタリーのシナリオを書くというお鉢がまわってきた。私が、釣りをたしなむということも起用の理由になったようだ。

事の始まりは、筋肉のかたまりのようなアトランティック・サーモン（大西洋鮭）を毛鉤で釣るという、英国紳士のもっとも優雅にして忍耐を要する遊びに開高さんがいたく興味を持ち、その道のオーソリティーであるところの元英国首相ダグラス・ヒューム卿にその旨を手紙にしたためたことであつた。殿下は、

「そういうことなら、拙者の領地であるスコットランドのツイード川にいらっしゃいな。ご案内いたしましょう」

と何ともおおらかなお返事をくださったというのである。

動機はできている。あとは私はその話に多少の盛り付けをくわえるだけだが、こちらも英国の毛鉤釣りには長年の思い入れがある。一七世紀に書かれた釣り文学の古典、アイザック・ウォルトンの『釣魚大全』を読み耽っていた時期があつたからだ。あののどかにして、どこか虚無的なくらい現実を背に向けた物語のテーマ“Study to be quiet”（静かなることを学べ）を軸に置いて話を展開することにした。

開高さんはまず釣り道具屋の老舗ハーディ社に向かった。ピカデリー・サーカスの近くにあるその店は思ったほど大きくなく、ほの暗く地味な印象の構えだったが、さすがに入り口には王室御用達の紋章が付いていた。鮭釣り用のダブルハンド（両手投げ）のフライ竿と鱒釣り用のフライ竿、リール、ライン、毛鉤などと共に英国紳士が釣りをするときのツイードのジャケットやニットカーボッカのズボンなどを揃えた。

「いやはや、紳士の遊びというのはここまでやらなければならんですナ」

と照れながらも、おしやれな開高さんは鏡の前でまんざらでもないような様子だった。

翌朝、ハイドパークでハーディ社のインストラクターと待ち合わせた。ダブルハンドのフライ竿によるキャスティングを習うためだったが、ルアー釣りに長年親しんできた開高さんにとってはかなり勝手の違うからだの使い方だった。腕を忙しく動かし、手首を使い過ぎるためにフライライン